

4-1-6-7 皮膚科

1. 概要と特色

1965年開院した我が国初の小児専門病院；国立小児病院からの歴史を含めると、当科は42年間にわたる小児皮膚科医療を行ってきた。その診療経験と症例の統計をもとに、国内において専門性の高い医療を提供している。

最近、皮膚科を受診する小児患者は減少し、反対に乳児検診を機に、皮膚疾患を主訴にして小児科を受診する患者が増加している。皮膚科医にとって小児皮膚疾患を診察する機会が減少すれば、診断能力は低下する。こういった我が国の現状の中で、われわれは小児皮膚科専門領域の特殊性を強く認識し、我が国の小児皮膚科領域のレベルアップによる皮膚科、小児科双方への貢献を目標としている。以下の表は、当センターホームページに掲載している一般向け診療案内を改編したものであるが、われわれの活動内容を記した。

2. 外来診療

アトピー性皮膚炎などの湿疹・皮膚炎	診断 アレルギー検査 外用療法 スキンケア指導
あざ（血管腫、太田母斑、異所性蒙古斑など）	乳児期での全身麻酔下でのレーザー治療 症候群などの全身診断と治療
足や手のほくろ	良性、悪性の鑑別診断 炭酸ガスレーザー治療
治りにくい円形脱毛（全頭脱毛など）、毛髪疾患 尋常性白斑	DPCPなどの局所免疫療法 紫外線治療 など
やけど	早期治癒を目的に 癒痕を予防
イボ、水イボなどのウイルス感染症	早期治癒を目的に 小児のための 無痛をめざした治療
にきび しみ	診断 治療
角化症、魚鱗癬	診断、検査、治療
その他の遺伝性、先天性疾患	診断、治療、遺伝子検査、遺伝相談
その他小児の皮膚疾患のすべて	腫瘍の小手術 病理診断など

3. 入院診療

アトピー性皮膚炎で自宅では治療が困難な症例、全身状態、栄養状態が悪い症例の改善、カポジ水痘様発疹症などの感染症を伴うアトピー性皮膚炎の管理、全身麻酔が必要な症例の管理など。

4. 褥瘡対策チームとしての活動

院内の褥瘡・創傷の治療、予防対策をチームで行い、対象症例を減少させることに努めている。褥瘡対策委員会（Wound-Ostomy-Continence：創傷、ストーマ、失禁対策チーム）は、皮膚科・形成外科・外科の医師、看護師、薬剤師、栄養士などからなるチームであり、活動内容は週1回の定期回診をはじめとするベットサイドでの診察と治療、医療従事者に対する勉強会などによる教育活動などである。

主な対象疾患は褥瘡、創傷、ストーマトラブル、点滴漏れ、オムツかぶれなどであるが、小児領域では成人とは異なる基礎疾患とそれに伴う使用薬剤の差、全身や局所の解剖学的、生理学的な差違、成長と発達に対する配慮、整容的な問題に対する配慮など特殊な面も多く、一般のいわゆる高齢者を対象とした一般の褥瘡対策がそのまま通用するものではない。われわれは小児の特殊性に合わせた治療を目指し、特に褥瘡については2003年度の127件と比べ50件内外に減少した。